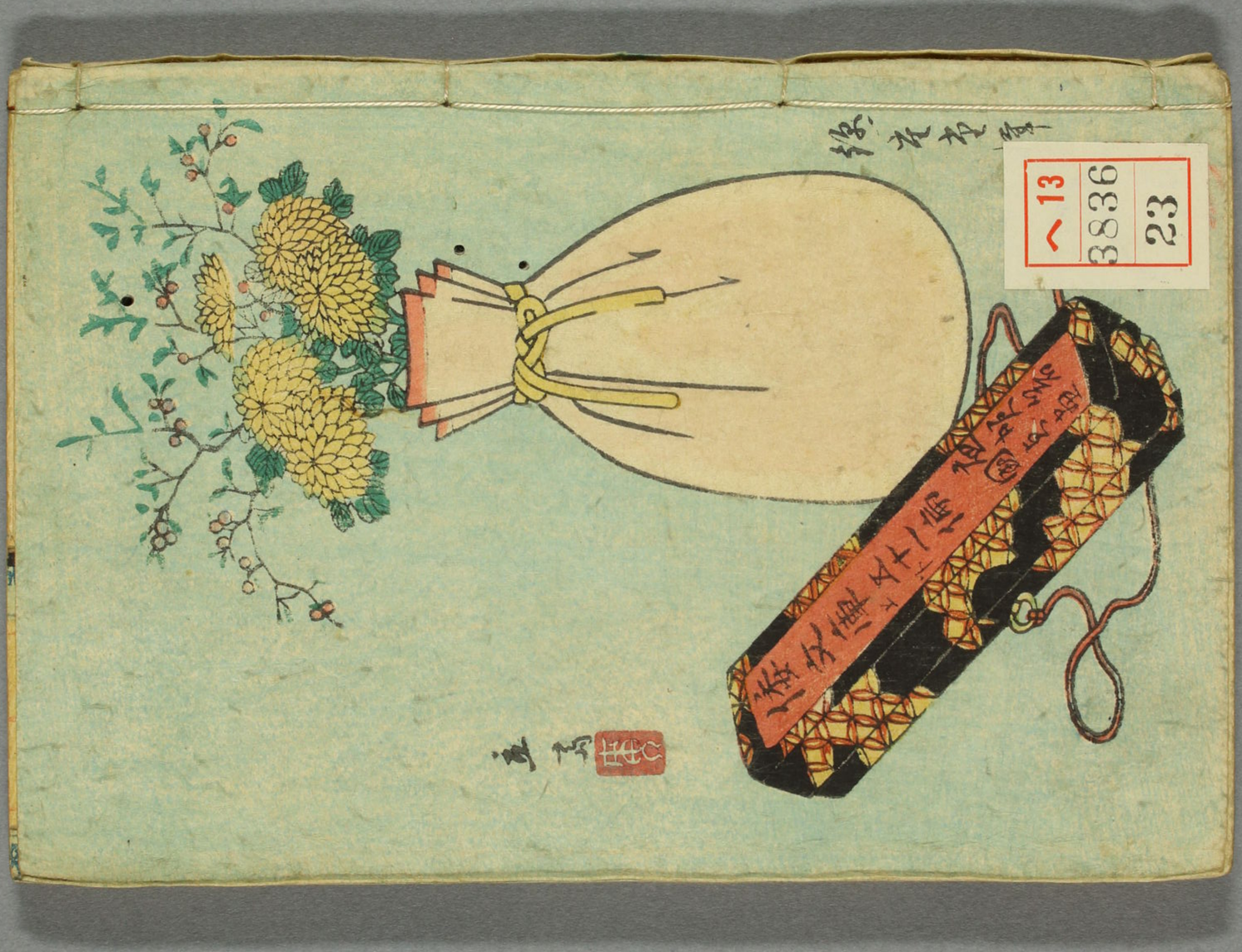

へ13
3836
23

上
重上刀屋

門へ13
號3836
23

見まぐ草さしの表紙らしへ角鼎あぞうれたれど
これなりは記事ぐのひえよあるべきものをしるす

あつ光草

うはしものゝ法

廣の灰をとゞめこのふしてさけまく
これ蝶出をのこよくのしてす
こ連へ記きてかげがしとなし
まづらべしとる志ら紙を下に
志れてそれ上へ右の蝶出をのせ
又その上へふしれ志ありとれあんの
志ありとれのせ竹のへらうらし乃
されはそその志れ人をあづれバ上ぐく
志らかしうつるあり又そのうへを
もとのてあづれバきゐるこ此ことにあらはし

昌平坂學問所

傳文庫五十一孫序

見事艸双しゝは半閑のごとく　叙は
波のごとくにして悟無の精光を　也軌
揮らす蓋あれのことはざんなを　礼バ
遠近芋の波は蒼しれ物といふ　人が
見る此これは下品戯作者の　宮和
言ことはきむくらるれ有うちれ　叟を
もちにちあが清くるてつゝあく　和原
又四章陀典十八の大陸を語る　書凡

もとへ世をゆるしてきむくらるゝものをや
志かれどくらかく志やりくらして 你お
抱ハ十大身子のうちに懐ばる 滅た
善根を法とめてきのふきかう ざんえ
れやあひ 結重るいれ 閑えん 受ける
耳ゑれ 誰も知ゑる通 新しるに 今更
自 拾ふ まづまゝ出さい 般若の 面ほく
ふれば 野雪に 撮て 鄙 撮乃 この孫仁
恨のこのぜくいれば 昔が 舍利 あつ ふ
新迄も 志やこの尾に 財跋なんぞ 什志
ある年の 客を申さば 法文に 徴 如 件

文久二年 戌の 秋 社
志んだんなり
万 ゑ 慈 聖 徳 卍 書

○舍利弗尊者宿命
天眼智定に入て鳩の
過去と未来の八萬
大劫を觀見する
是大論の
説にある
○舍利弗の
舅長爪梵士
拘絺羅
尊者とつふ
佛道に入て名を

六齋日
毎月八日十四日
十五日廿三日廿九日
卅日 小ノ月ハ廿八日をうして六日とする
十齋日
朔日八日十四日
十五日十八日廿三日
廿四日廿八日廿九日
三十日
此日に放生されば その
功徳勝まりといへども
作法を知ざれば入ってつ
いとなるとは本文を
よのまく志るべし

○世尊らごいの女ぼうに
濡曇弥尼の
持齋
のつゝを
説なふ

らごいの女房

らごい

○せんさいの
ちゝをあく
らごいが
妄語を
きんじさ
ふ
ごいち
どろん
のせう

○灸匿龍王童女

身を現して祇園精舎の
犍稚に障碍をなす
此時跋難陀件と
いふ牛に化して

灸匿竜王

けいにゝの國夫人

目蓮

△角に
かけて
害せん
と
まつる

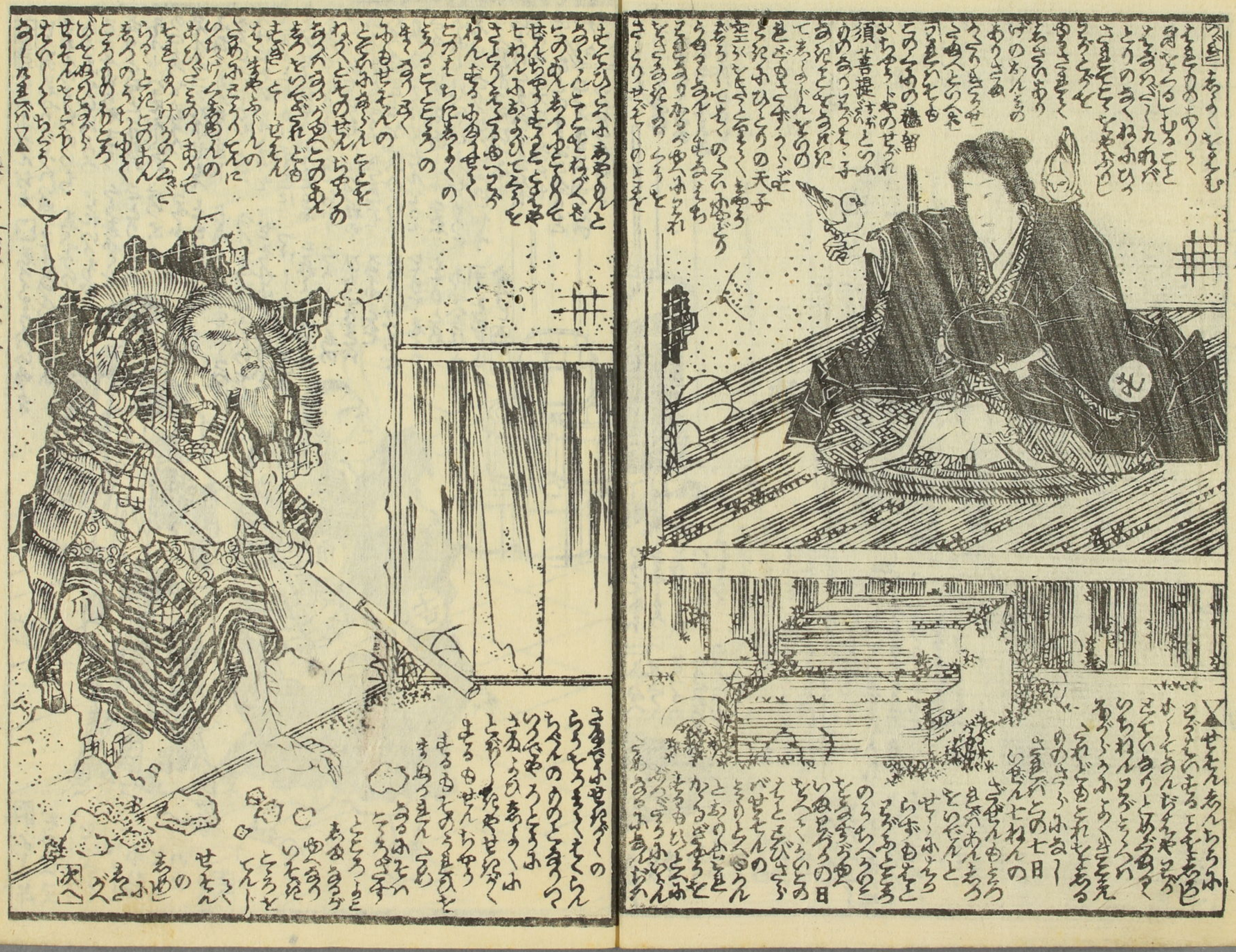
▲羅漢
参詣の
諸人を△

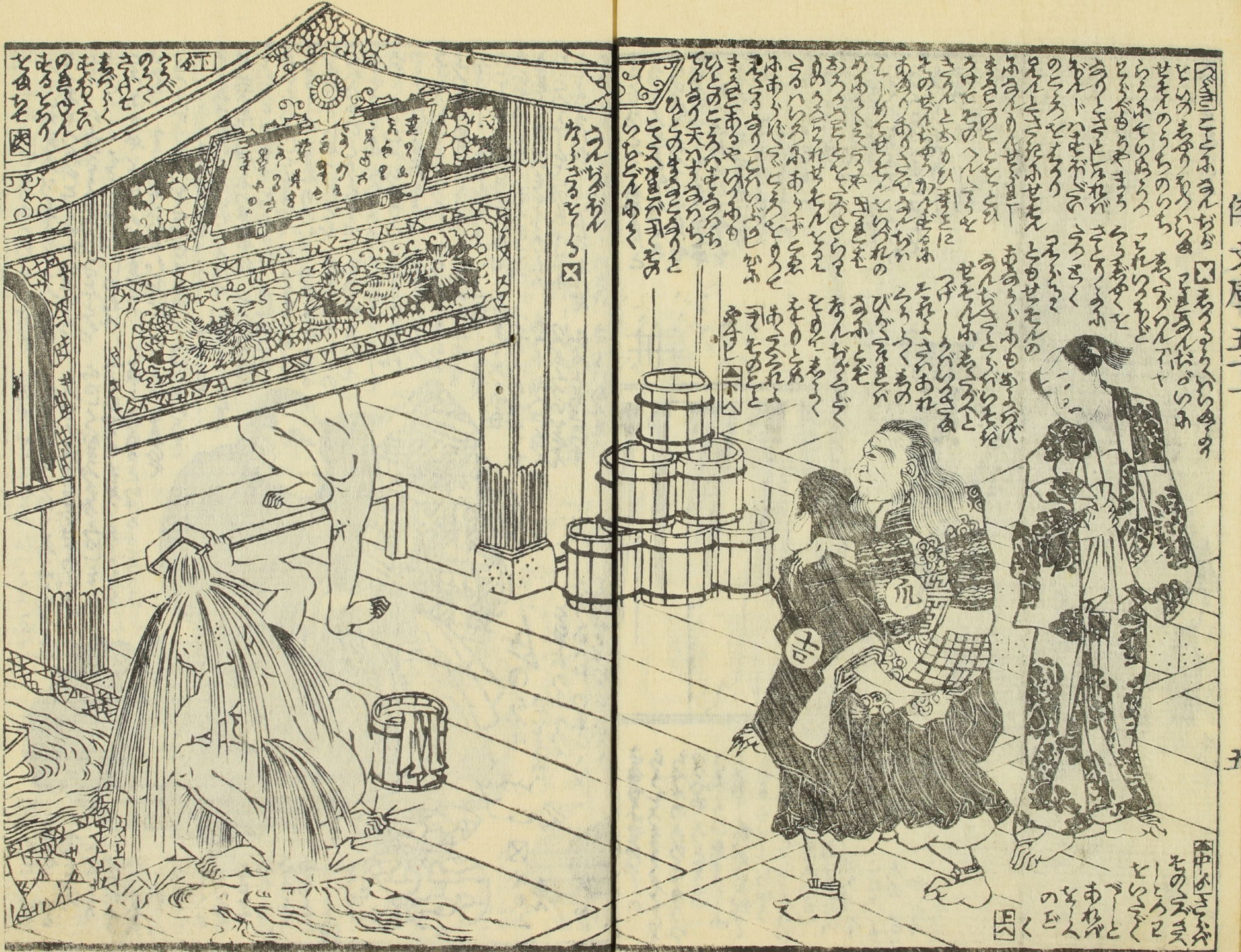
舎利弗

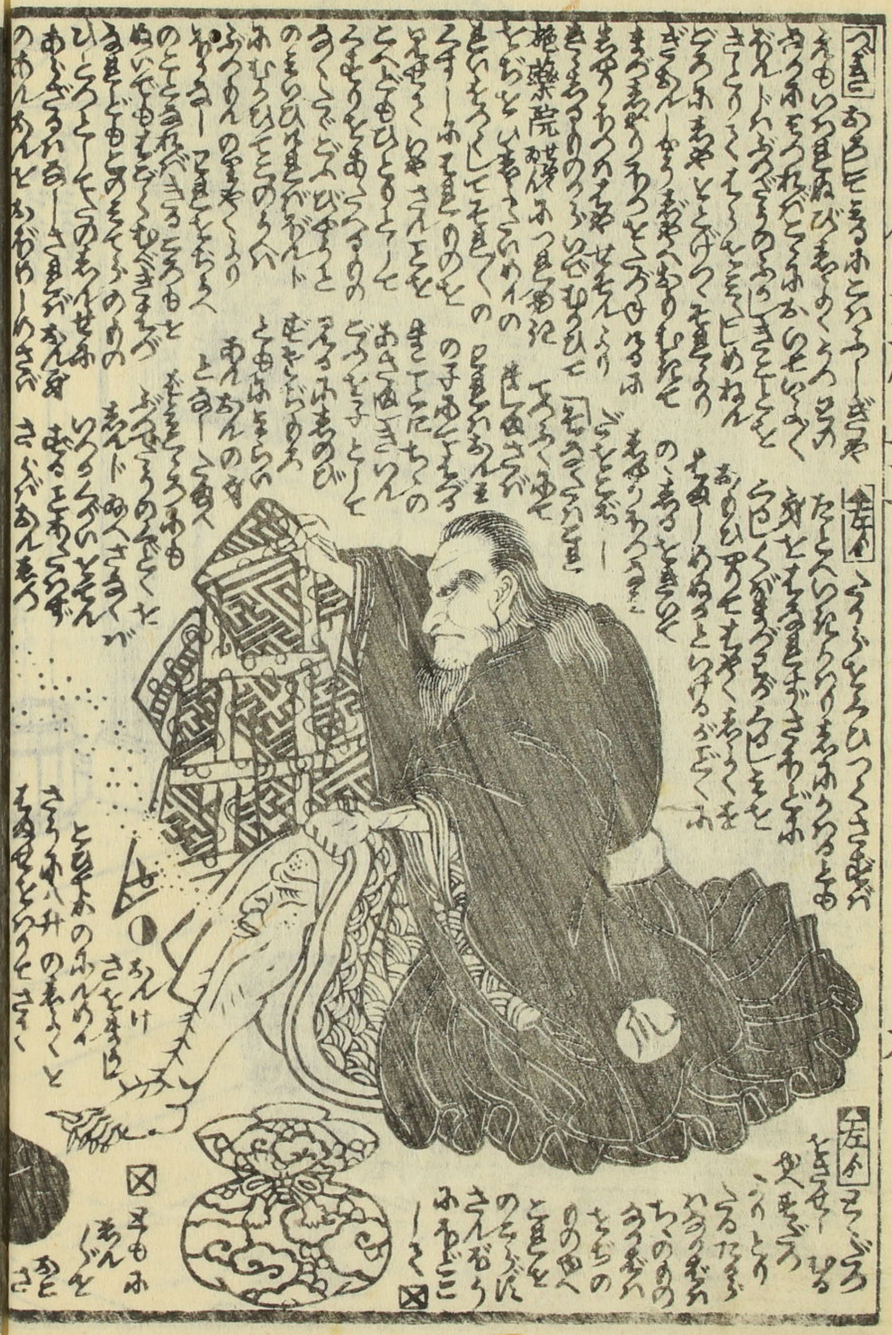
いぎ女

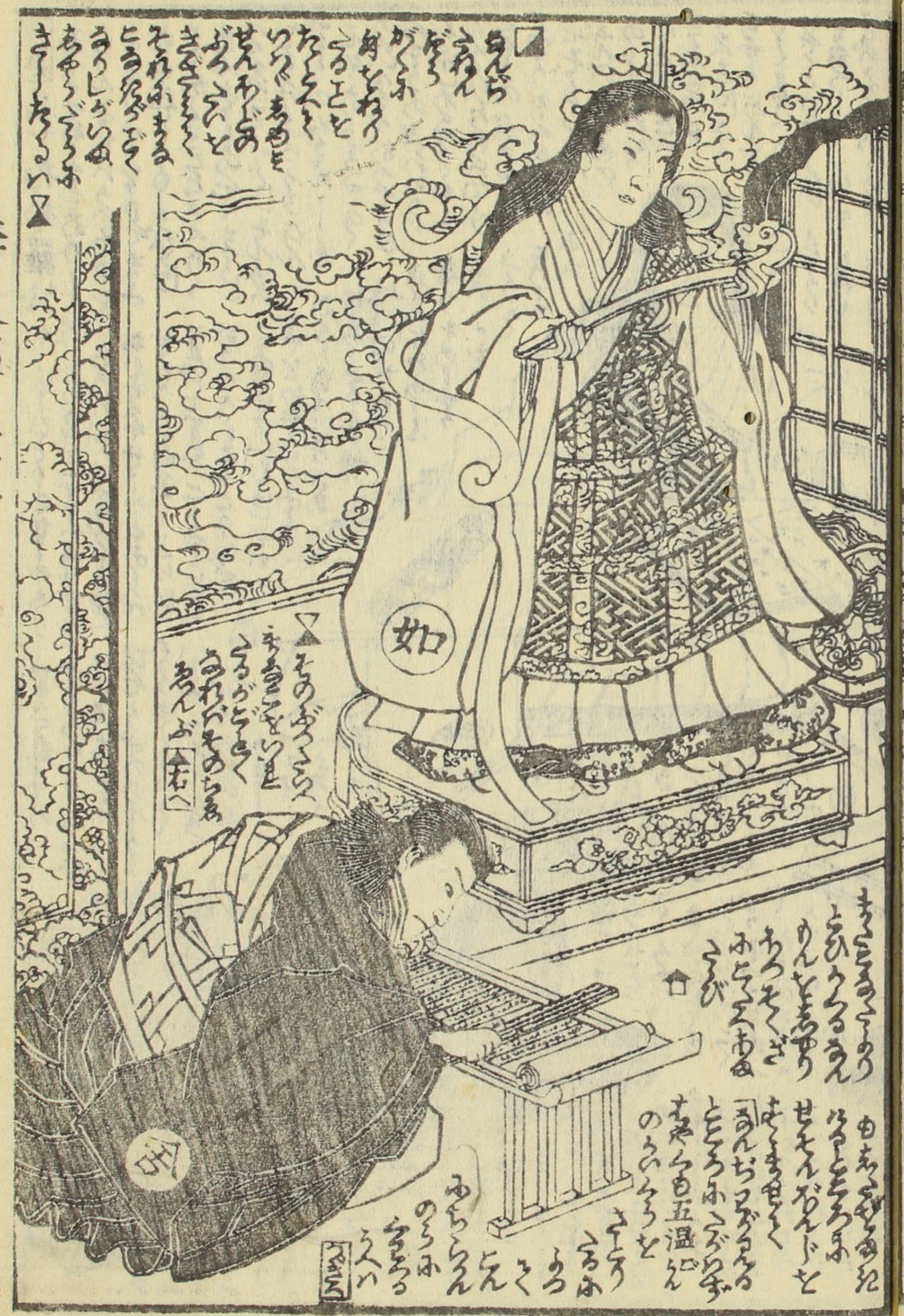
命婦天上生

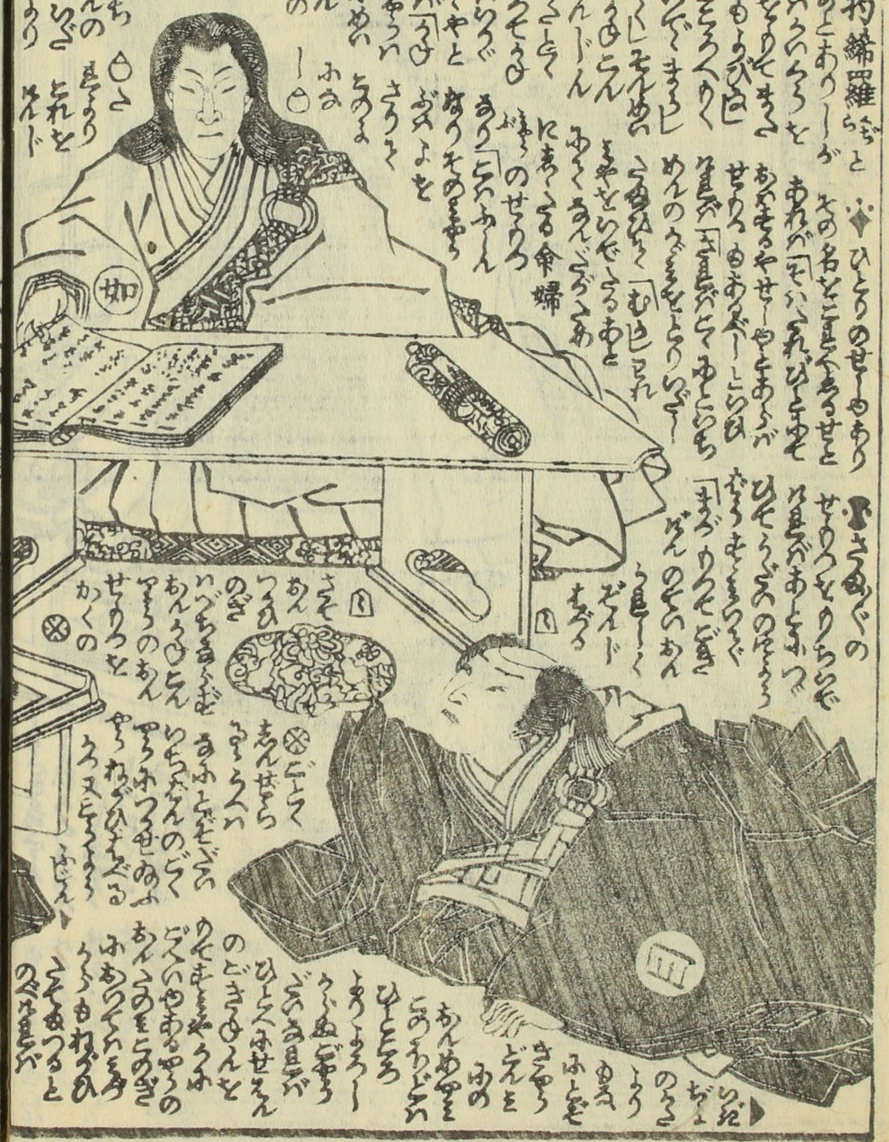
光明大臣











徳放生會 魚鳥會 竹

万亭應賀作

歌川國貞畫

獨娘聟八人出世双六

大錦六枚継

万亭應賀作
一陽斎豊國画
惺々狂齊画

樂屋壽古六

二芝居役者三六名
化粧の場
五極画白
き双六之

男女振分 役替壽語六

同作
同画

奥奉公出世双六

同作
同画

奥の手趣 鶴秦双六

同作
貞房画

武家奉公出世双六

同作
豊國画

子寶延命袋

同作
同画

紅摺全一冊

倭文庫五拾一編

万亭應賀作

歌川國貞画

下

住よしの蟻の名にしぞ

住よしの浦にみる色もつきれ袖バ
かりにも人に宮れぬるの時

名尾筆

る間さの鶯によしぞ

もう夷のこのしことにまた
帰るかとの
住家より

来つれ鶯も
このもてなし

筆

牛のたぶれのうた

若かを家は仕事ある事
此にかうしを仕にのる事も
たれもしまこの那

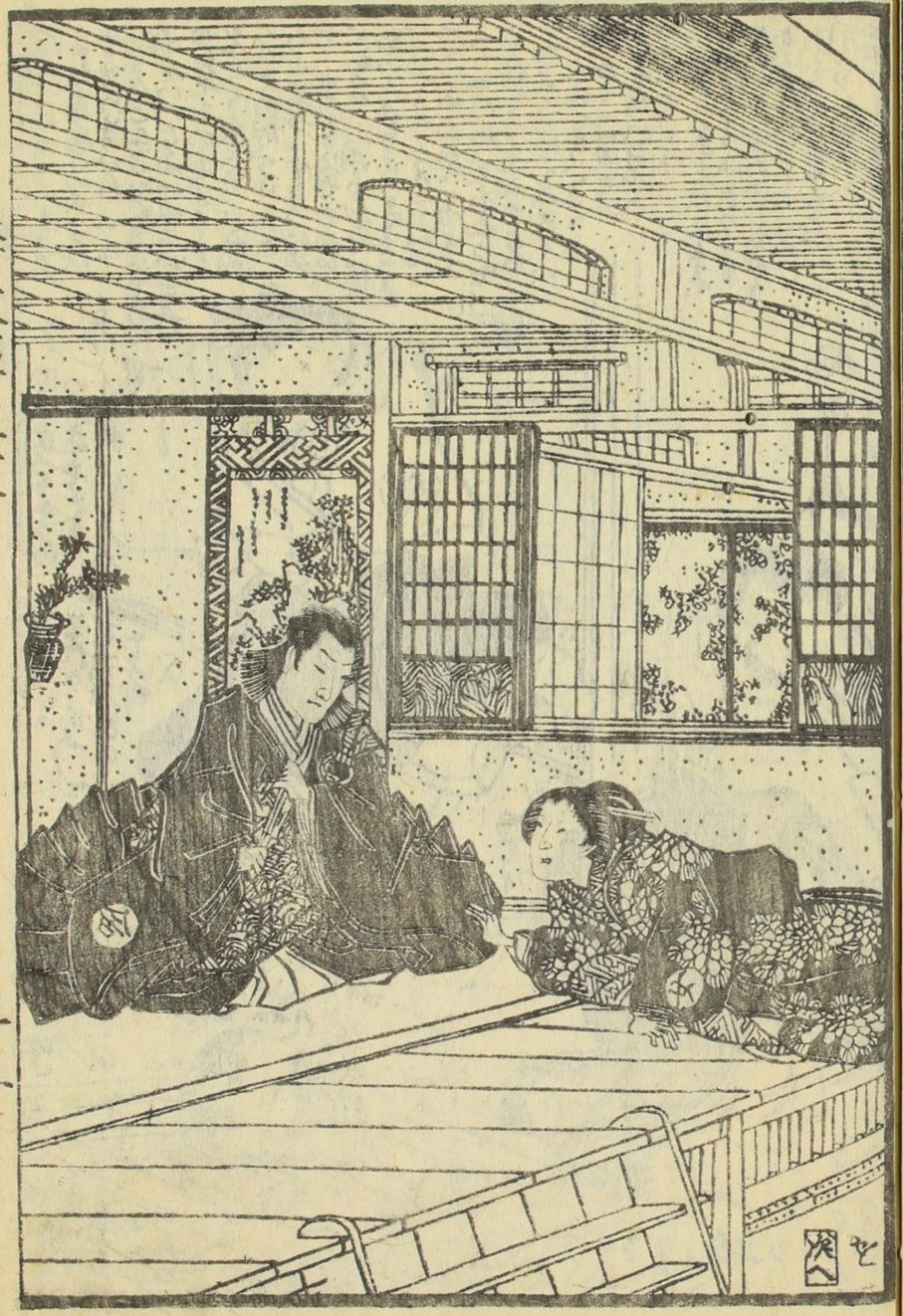
筆

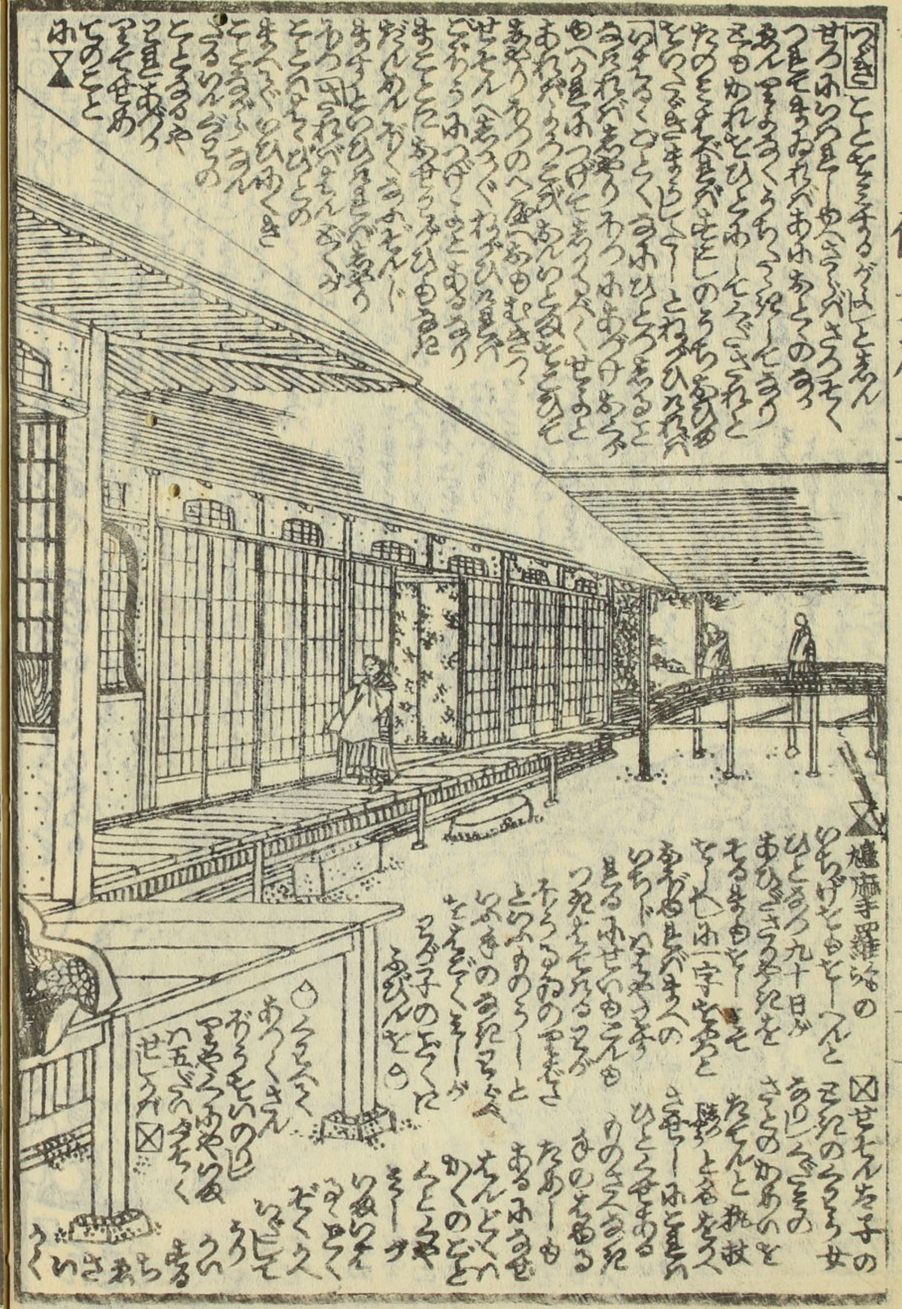
上の巻より

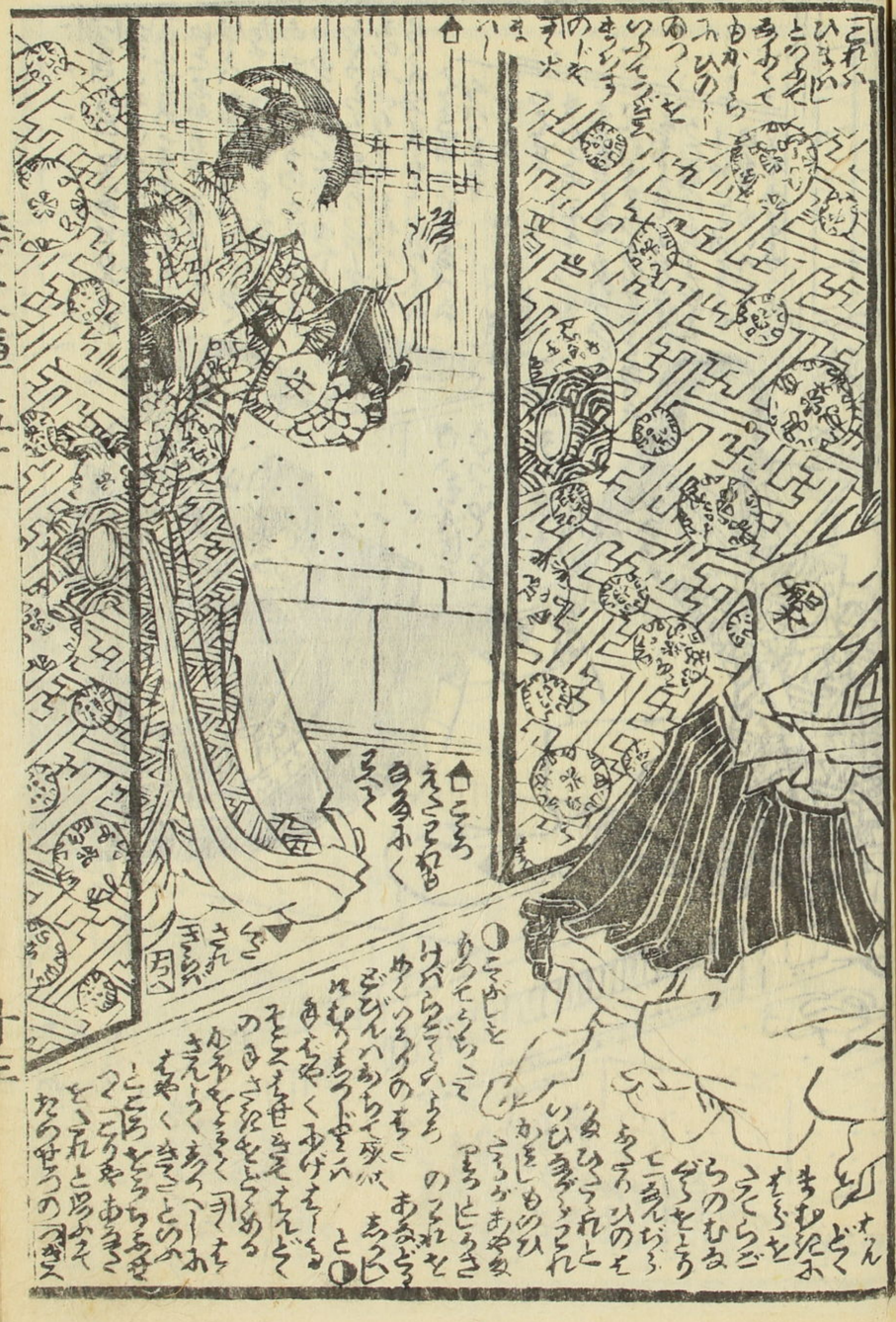
[illegible]

それ者つけいがくもんをつきてひとをぞし

[illegible]

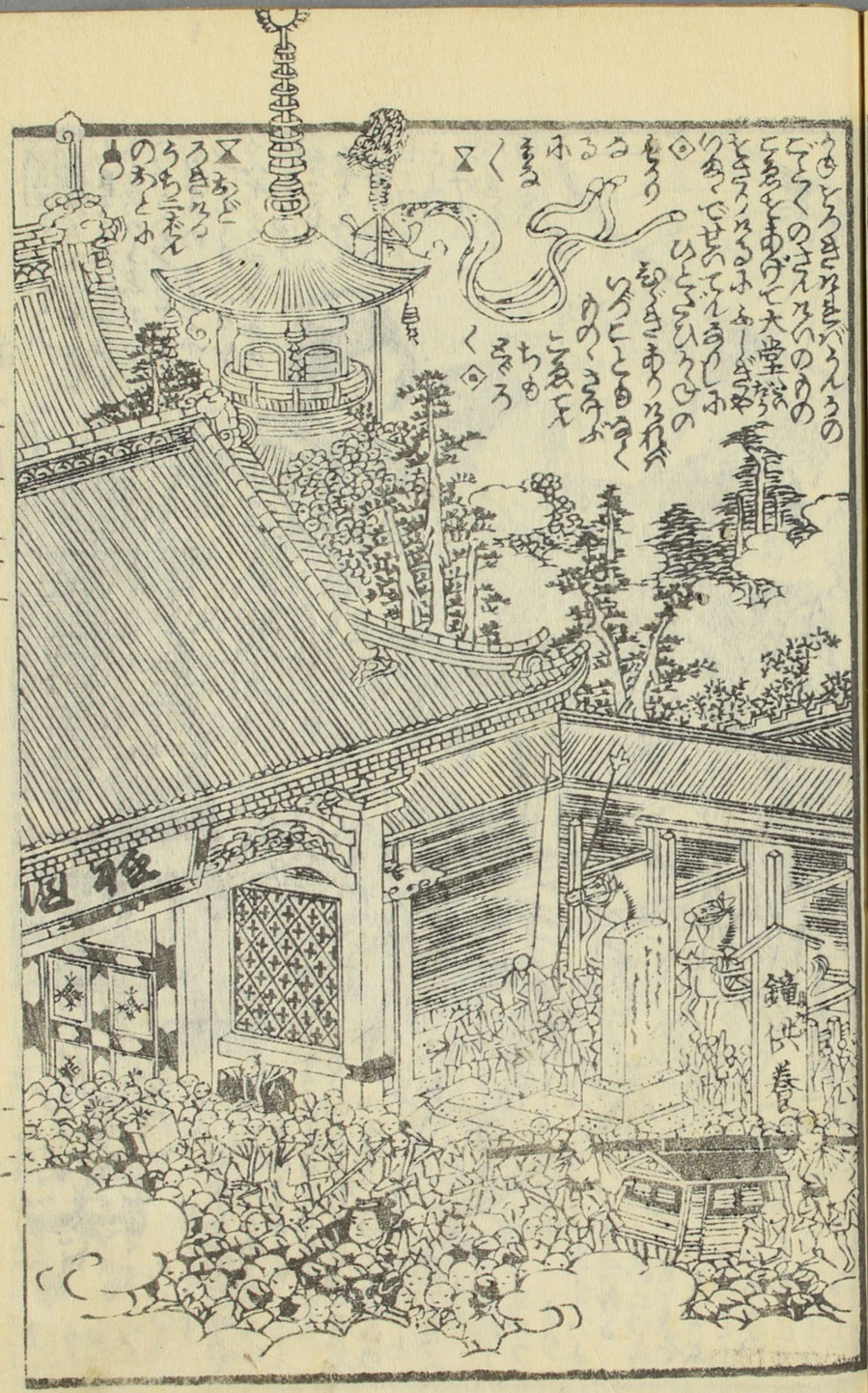




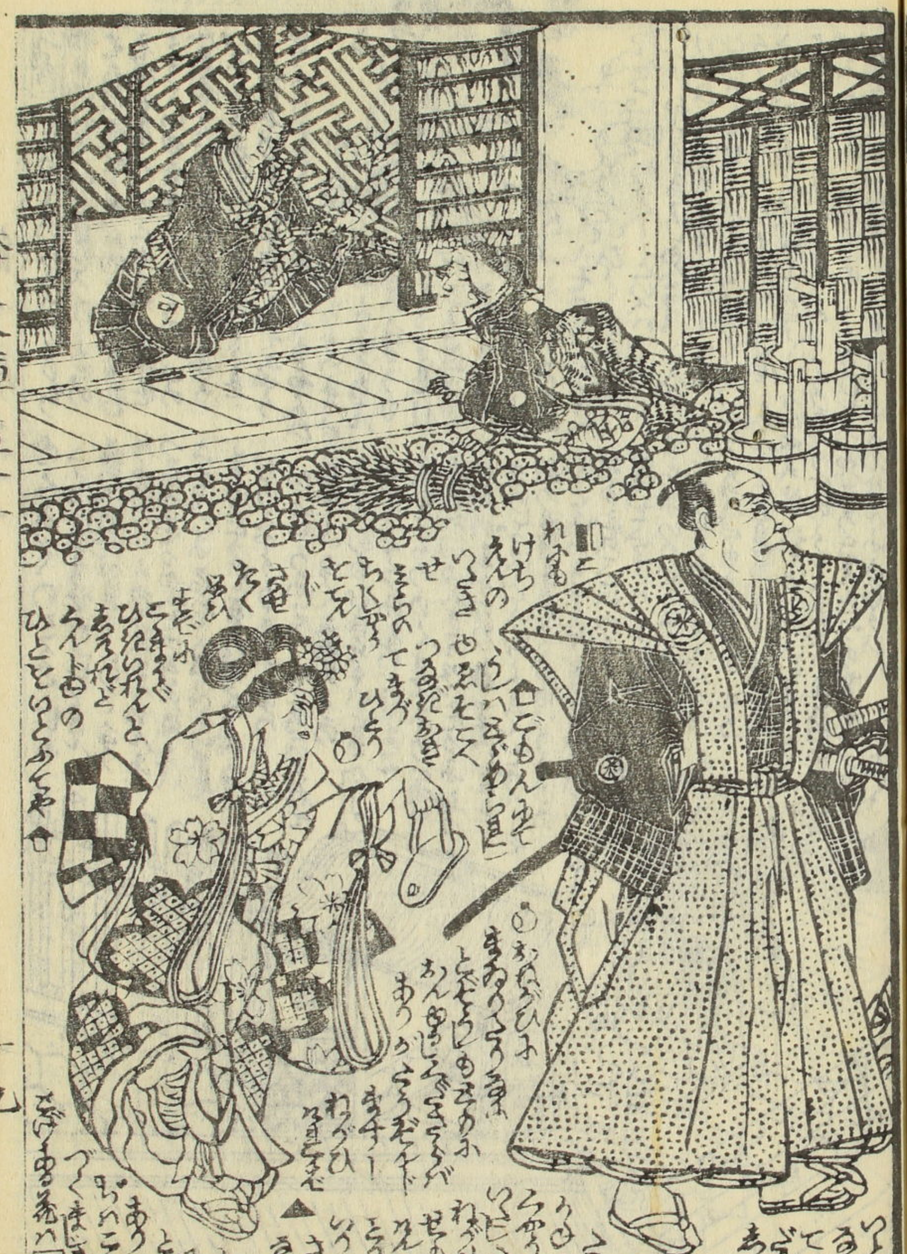


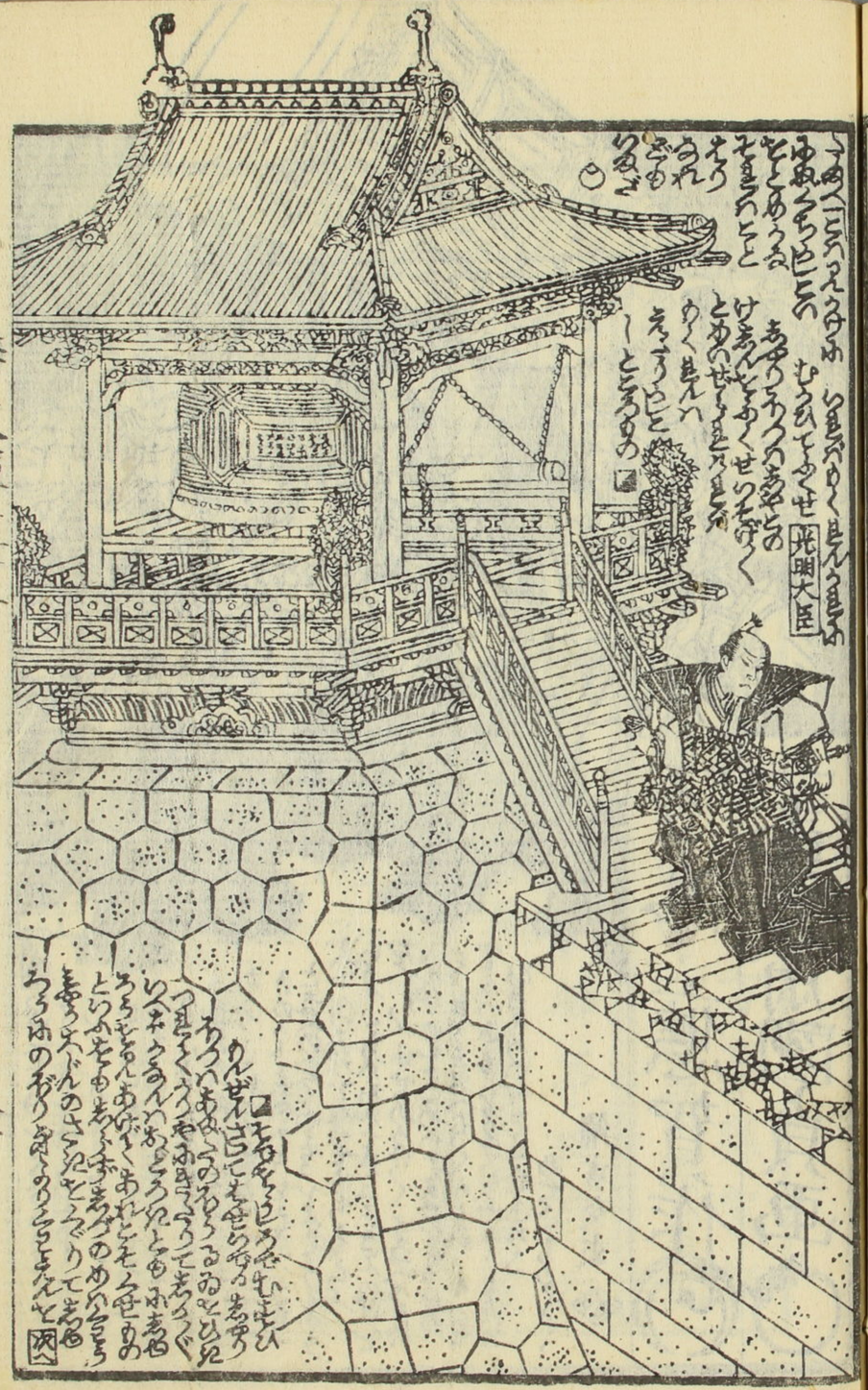
下の巻
つゞき
舍
ら
舍
も
上へ
つぎへ

四ツの鐘乃うち三ツハ畧ス



御雪之間





元治二年乙丑春新版目録

倭文庫（ぶんこ）
五十二編
五十三編 五十四編
万亭應賀作
一壽齋國貞画

新編朝日譚（しんへんあさひのかたり）
初編ゟ 柳亭種彦作
五編迄 一恵齋芳幾画

重井菱染（しげのぬびしそめ）別小紋（ちいさんこ）
為永春水作
八編 大尾
歌川豊國画

常磐津懐中本
初編二編 小本ゆく首付
三編四編 あり 極上ゆうり

十返舎一九作
同 五編 大尾

金繪草紙本類問屋
人形町 上州屋重藏板

万亭應賀作

一壽齋國貞画

上

釋迦の皇使庫十編序

釋氏條記

万亭應賀校釋

扨子定規

何つ先学

白粉の善悪を志る法

新しくぬるわしこれは何のとき品を
もち思しこれを目利するなれ
わしろ以を空に焼て
見るにはきこのごとく
鉛粉なるは上品なり
又焼て色の黄赤に替るも上人
焼て色の替らぬはまたおこのる下品

目蓮の母青提女
大惡心にて三宝供養
の貨を以て鳥畜類
を買求め自殺して
肉を盛獨扶樂に耽りて
五百僧齋を勤ざる而已
ならず、反て衆僧を害
せんと計る大罪に仍て
遂に阿鼻地獄に墮る

目蓮の母青提女

王舍城傳相長者の後家

目蓮家を出奔して后阿羅漢に成る叓を聞傳へ其妻祇園精舍に來り凡情を述べく俗家へ連還らんかたるを目蓮神通をもつて人間の四苦を現し愛執を絶しむ条は豫め禪秘要經の依説

五十二編 ももそとめ

さるかにとかっせんのくだり

それ
ん
ぶすぶす

せをえのあつ
せをこがうむ
ぱてさんさんの
けうこうのえんぎめ
をあーこそみのん
ぜんへゆえんと申ふ
あるときうひとのうちめを
さんげんところまろびつゆの
さんにきうまのとより黒白斑
まうらのにつのをあうくく
あををきうつてをぐうのくえのらえ
とまるゆりくれんまのとれをと
もうさるおまをもあをもをろびと
うぐにいりくりのそあをそろーく
つのゆうけてうぼをそんとまうそめ
のをむうとあをえつうくちうまく
ちんちゃうえんのもうちんごうをと
をまくぐめーつくひーぐけのゆごてく
をちくゆをのをそくくれをまくのた色ハ
そうねんまうもひとけーそ名を件ぞ
とようびうぐくあくえんそらら
ばかからえんをものがのせんとをてぐいうる

左の上メ一ころり
くふふひてかる
むぐことん
ありたらん
そもつまあうの
さ負いあと
ぐのふ
ある
と
きけが
これそうぐ
そりてやの
つまあの
つくり紀を
そぐめんと
まるをりも
いちぐんの
くうくもそ
くちうり
ふれいぐ
せばその
ふわいらん
のぐくぐまぐ
りくまんかあれ
つくうあらうちち
そのうろくものの
うちふつまあうのん
まぐをあうんーく

あはころーくつまもまくりくれんまり
りくぐをまうげをうさめんそくくひされと
らぐろぎうふあしりぐせうしもえらくふ
あーをもんぐそくもんとまるこのせりあむ
たぐひふこんぐうつぐれあるゆやまも生をもせぐ
生くまりぐれもせ子うんくふのくれんさてもの
えばーくもうのくまうまぐのくれんさてもの
ぐんつまれゆくふそとあくさうぞ
そくざふ神通ぐれを
りて雲霞うんとらふ
ちひさうむーふ
けーくく件ぞ
のふ

▲ちあ
くまの
ちうく
りてぐ
のひゆくと▲

あをを

うぐれくはしむそ
そるよりりくはんん
えうんまんあらふ
くくりはぐうふぐ
竜身にうとうそ
さぐふぐそうレを右下へ

うもるゆふ
りくまん
のそぐせそん
のこまうて
いぐるふ
まやちよ
そのまうご
ふんんこちと
そふくつぐうの
たいさんのあと
ゆそひつそと
ふりしをさう
のそれふせそん
ちうぐくと
ぐーはう！
ふまこぐそのさ
らんをあぐゆふ
ここころあり
りつまそらぐれ
るここそ
のふれば
せそんさの
とあと
うせ
ゆふ

次へ

應賀作 國貞画

下の巻へ

獨娘聟八人出世双六

大錦 万亭應賀作
六枚継 一陽斎豊國画
屋ゝ狂齊画

樂屋壽古六

三笑居後
君ニ云ハ者
化粧の幅
玉極画白
き双六之

男女振分 役替壽語六

同作
同画

極あらしろ紀 きいれあり

奥奉公出世双六

同作
同画

美の手趣 鳥奏双六

同作
貞房画

武家奉公出世双六

同作
豊國画

子寶延命袋

同作
同画

紅摺全一冊

倭文庫五拾弐編

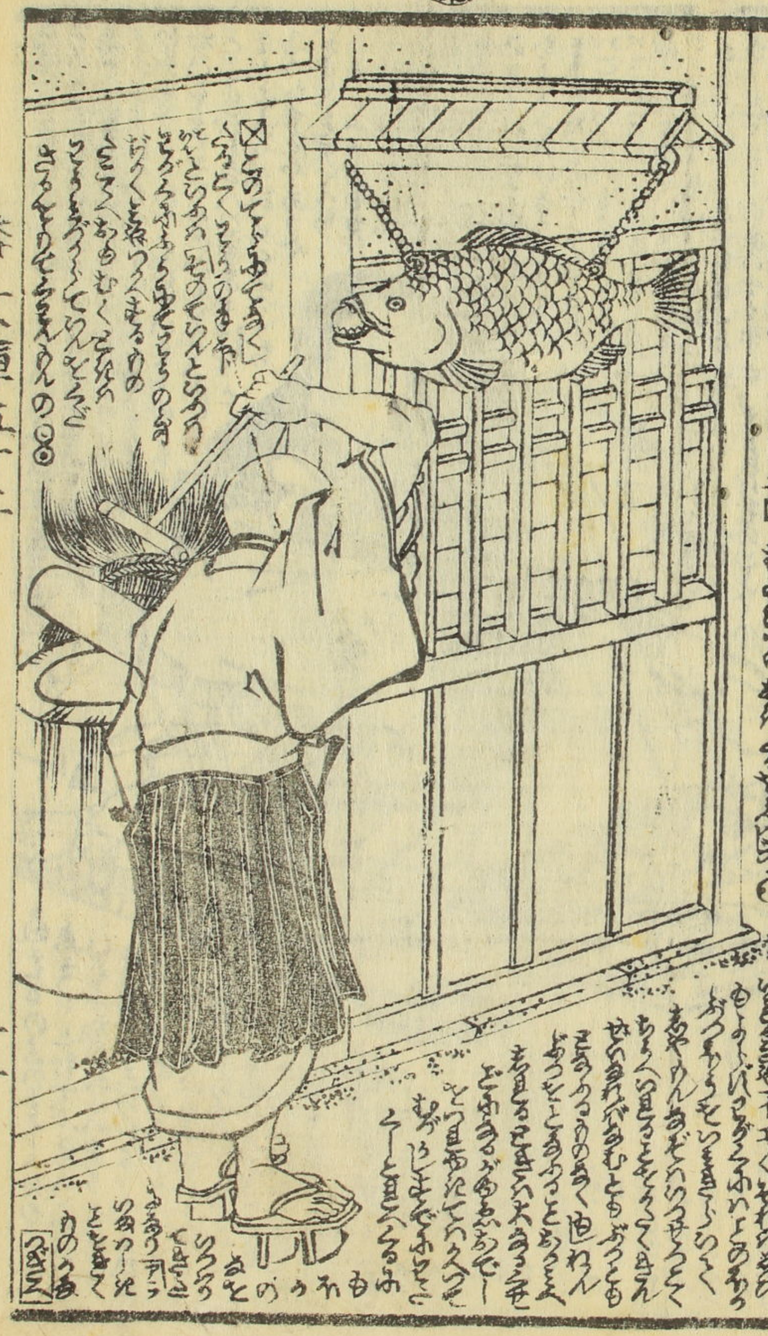
重上州屋

下

あつ免忤

萬の邪鬼を
たらふ術

十二月晦日
東南へ伸る桃の
枝を出りて
釘として居宅の
四方地一打過重ね
翌年中の鬼を
見を鎮宅桃厭の術と云あり



金

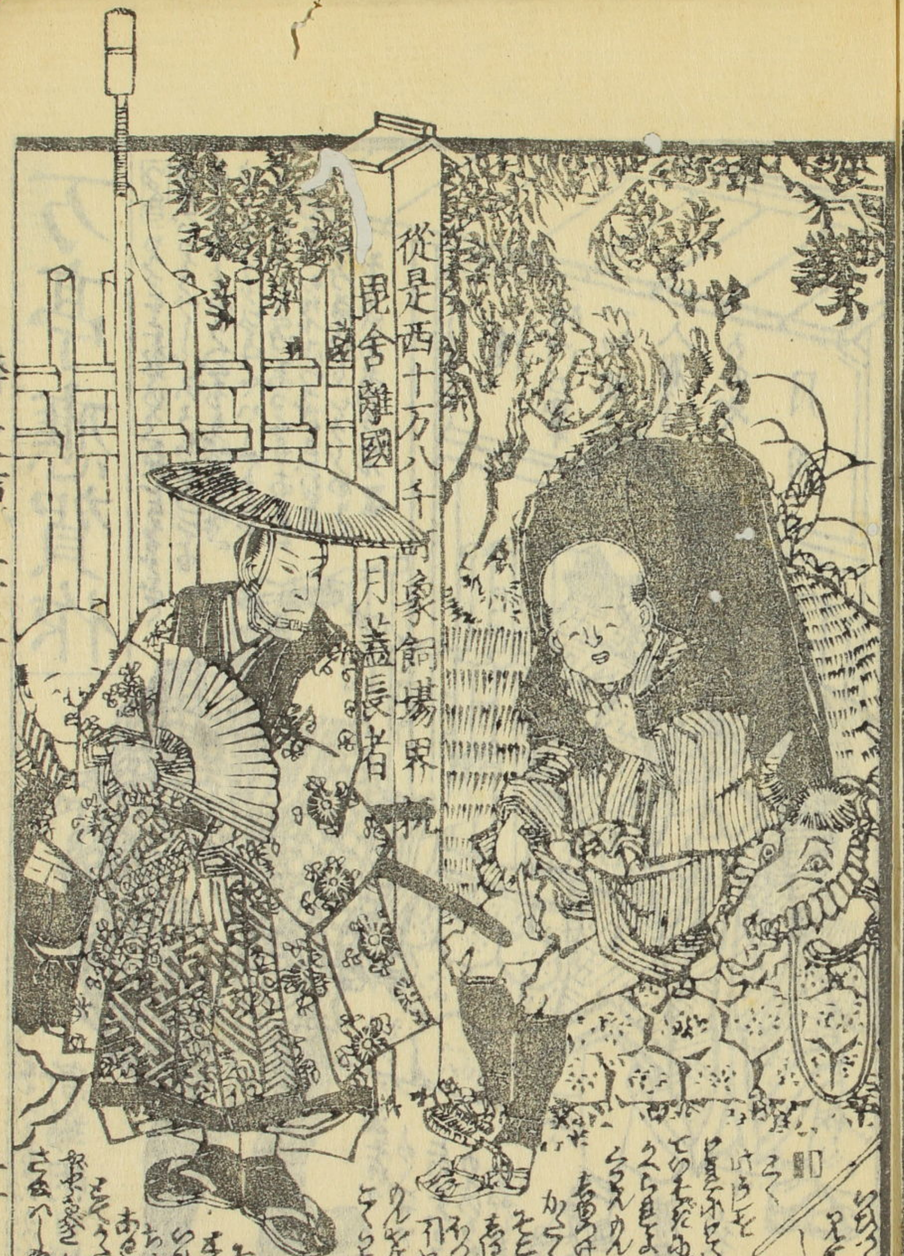
五

河流

金

四
妙

寿
大



元治二年乙丑春新版目録

倭文庫 五十二編 五十三編 五十四編 万亭應賀作 一壽齋國貞画

新編朝日譚 初編分 柳亭種彦作 五編迄 一恵齋芳幾画

重井菱染別小紋 八編 大尾 為永春水作 歌川豊國画

常磐津懐中本 初編二編 三編四編 小本 ありて 上下 ありて

十返舍一九作 同 五編 大尾

重繪草紙本類問屋 人形町 上州屋重藏板